



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

## 知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3031 号 2016.5.19 発行

### 居心地いい居場所をみんなでつくる 松戸で「おうちプロジェクト」スタート



東京新聞 2016年5月19日

「おうち」でギョーザ作りを楽しむ若者ら=松戸市で

松戸市内の民家で、福祉関係者ら市民有志のグループが、だれもが思い思いに過ごせる「おうちプロジェクト」にトライしている。決まっているのは、毎月第一土曜に集まり、夕食を作って食べるぐらい。何をするか、しないかは来ている人の自由。プロジェクト代表の桑田久嗣さん(32)は「世話をする、される関係じゃない、居心地のいい居場所になっていけば」と話している。(飯田克志)

「こんにちは」。今月七日午後三時すぎ、住宅街の民家に若者からシニアまでの幅広い年代の男女が

三々五々に訪れた。初めての人も一緒に夕食のギョーザを作ったり、雑談したり。

一時間半ほどたつと、テーブルや掘りごたつに、きんぴら、浅漬け、焼き上がったギョーザが並び、二十人ほどがにぎやかに夕食を楽しむ。食後もカードゲームやおしゃべりで、わが家のようにくつろいでいた。初参加の男性は「緩くつながれる場所があればと思って来てみた」とにっこり。

プロジェクトは、精神保健福祉士の桑田さんら同市を中心にした福祉関係者や、自宅を「おうち」に開放している精神疾患のある三十代の男性らが運営。

桑田さんたちは仕事を通じ、人や地域とのつながりが希薄な人が少なくないと感じていた。障害などの福祉制度も以前よりきめ細かくなってきているが、逆に対象者や支援内容が限定される側面もあり、当事者の思いと支援にギャップが出たり、制度のはざまに落ち、孤立する場合もある。

こんな現状に違和感のあった桑田さんたちは昨年十一月、「自分の居場所を自分でつくれ、つながり合える場を」と、初めて「おうち」を催した。

「おうち」への参加条件はなく、自己紹介もしなくていい。知人や友人の口コミで広がり、ネットで興味を持って訪れた人もいる。

二月から自宅を開放する男性は障害のある兄と二人暮らし。「いろいろな人が家に来て疲れることもあるけど、自分はひきこもり癖があるから、集まりが月一回あると周囲が気に掛けてくれる」と照れる。一方「堂々と、たらたらできる場所があるといいと思っていた。ここに来て孤立感が自然に少しでもなくなればいい」と話す。

始まったばかりで模索中の「おうち」。桑田さんは「最初は肩に力が入っていた。それだと来た人も緊張してしまう。今は自分も楽しんで、後は場の雰囲気に任せる感じかな」と、カードゲームで一緒に盛り上がっていた。

参加費五百円。午後三時～八時。夕食は同五時ごろ。いつ来ても帰ってもいい。問い合せはプロジェクトのフェイスブックから。

<支えられるココロ> 若年性認知症を詠む（上） 中日新聞 2016年5月18日



二人三脚で作品作りを続ける福田人志さんと中倉美智子さん＝長崎県佐世保市で

稲穂にもなれない僕は虫になるー。

入院中に所在なく、散歩に出掛けた。病院の横に広がる水田。出穂前の青々と立った稲に一匹の虫がいた。ふと思った。稲は米を実らせ、ワラも利用価値がある。自分はもう、一本の稲ほどにも人の役に立つことがないだろう。ならば虫になるしかない。やり場のない無力感を、ベッドに戻りメモ帳に殴り書きした。

二〇一四年七月。長崎県佐世保市の福田人志（ひとし）さん（53）は、十日間の検査入院の末、若年性アルツハイマー型認知症と診断された。

検査中に撮影された脳血流を表す画像は、頭頂葉が一段と色濃く写っていた。血流が悪く、脳が萎縮している証拠。覚悟はしていたが、診断を告げられた時は「気持ち溶けた」。その後の医師の言葉は次々と頭の中を素通りしていく。だが、調理師としての仕事も含め人生のすべてを失ったことだけは分かった。

山口県岩国市生まれ。幼いころに両親が離婚し、妹を含む母子三人は叔母を頼り佐世保に移り住んだ。病弱な母を養うため、自身は就職に有利な工業高校へ進学。しかし、高二の時に母が亡くなり、ずっと興味があった調理師の道を歩む決心をする。

卒業後に就職した大阪・北新地の老舗料亭で、持ち前の才能が開花。八年で約二十人いる調理場のナンバー3になった。ただ、今度は世話になった叔母が病気となり、面倒を見るため帰郷。高齢者施設や病院の給食調理担当として、おいしく食べやすいメニューの開発に手腕を発揮した。「五十代半ばになったら自分の店を出す」ことを目標に、がむしゃらに働いた。

「あれ、何だか味付けがいつもと違う」

同僚からそう言われ始めたのは一三年の末ごろ。次第に指摘が頻繁になり、自分でも味の違いが分かりにくくなっていること、調理器具の片付け場所などを思い出せなくなっていることに気付いた。原因は思い当たらず「忙しく疲れているせい」「風邪をひいた」などとごまかしていたが、一四年五月、自宅で持病のぜんそくの薬と間違えて睡眠導入剤を飲んだため昏倒（こんとう）。救急車で病院に運ばれ、ようやく精密検査を受けることになった。

「アルツハイマーのこれからは人ではなし」「溶けきったアイスクリームを悲しむように、僕の記憶もずいぶん流れ落ちた」「針すら通さぬ心の穴もいくつになろうか」「目覚ましのベルで七転八倒が始まり、隣で猫がほえる」

退院後は、病気を憎み、自分と、自分を産んだ両親さえも憎む日々が待っていた。認知症の薬の副作用もあってか、夜も眠れない。食卓の横のソファに陣取ったまま、次から次へとわき出る心の叫びを再びメモ帳に書き続けた。どう毎日を生きていいか分からない中「筆先に命が宿り、だく流のごとく下りて時が生まれる」。そんな一文のような心境だった。

引きこもり状態が半年も続いたある日、半分丸められ無造作に転がっていたメモ用紙の束を見つけ、心を揺さぶられた人がいた。福田さんと同居する事実上のパートナー、中倉美智子さん（62）だ。中倉さんがはがきなどにそれらの言葉を筆で清書し、福田さんが色鉛筆で柔らかな絵を添える。二人三脚で「老行の歌」を制作する「老行の会」の始まりだった。（白鳥龍也）

## <支えられるココロ> 若年性認知症を詠む(下)

中日新聞 2016年5月19日

書と絵で温かいメッセージを伝える福田人志さんと中倉美智子さんの作品

「さびしくて自分にメールを打っては笑う」「涙したあの言葉をどこへやったの、僕の頭よ」「恐れてもくじけても、たましいが前に僕を進める」

机の上に転がっていたメモ用紙の束。書き殴られたボールペンの文字を読み、長崎県佐世保市の中倉美智子さん(62)は、同居するパートナーの真の胸の内を知った。

元調理師の福田人志(ひとし)さん(53)が、二〇一四年夏に若年性アルツハイマー型認知症と診断されてから約半年間の心の軌跡。「激しいけれど、これほど素直でみずみずしい言葉はあるだろうか」。同時に「この言葉を残さなくては」と思った。

はがきや半紙に、得意の書道で書き写す作業が始まった。誰に見せるつもりもなかったが、背景に色模様を書き添える工夫もした。福田さんも色付けを手伝ったり「今度はこんな書体に」と注文したりして、二人が「壺行の歌」と名付けた作品は増えていった。

約二十年前、借家を探していた福田さんを、夫を亡くした中倉さんが自宅に下宿させたことをきっかけに、二人は知り合った。中倉さんにとって福田さんは九歳年下で、当時幼かった二人の息子の良い遊び相手。しかしやがて家族同様となり、福田さんが独立して料理店を出す際には、共同経営を約束する仲となった。

そんなさなかに福田さんに下された宣告。魂の抜け殻のようになった福田さんに対し、中倉さんは「誰かがいなくては、この人を退院もさせられない。私が受け止めるしかない」と決心した。

初めは「俺を精神科病院に入れろ」と自暴自棄になる福田さんと衝突を繰り返した。が、「壺行の歌」の制作を機に二人の心はまた一つになっていった。

いずれも独学とはいえ、生命力がにじみ出すような中倉さん独特の書体に、繊細で優しい福田さんの色鉛筆画を添えた作品は、二人の世界観そのもの。それを見た知り合いの何人かが「もったいない」と後押しし、一五年六月、二人は「壺行の会」を名乗って市内のイベント会場で百点近くを展示する。

何の宣伝もなかったが、介護を経験した人たちなどの間で「気持ちがすごくよく分かる」「作品を譲って」と評判を呼び、四回の展示会を重ねた。

最初は、心の内側に引きこもり、来場者と話もできなかった福田さん。次第に会話も明るくこなせるようになっていった。障害者施設にボランティアで通い、調理手伝いのため再び包丁を握るようにもなった。

味覚は戻らず、物忘れも相変わらずだが、症状は落ち着いている。「壺行の会」の活動は「命ある限り楽しく続けたい」。料理店の夢に代わり、中倉さんとは認知症の人や家族のためのカフェを開く計画も温めている。

「私は性格が男だから夫婦は無理。(福田さんにとっては)母親か姉みたいなものかな」と笑う中倉さんに、福田さんは「どんな形にしろ、なくてはならない人。唯一、僕を地獄から救い出してくれた」と真顔で応える。「いろんな道があるけれど君が照らす道が一番」。福田さんが詠んだ歌のように、信頼が結ぶ男女の新しい形がそこにある。

「人は誰でも愛情という絆創膏(ばんそうこう)を病んだだれかに貼れる」「毎朝やってくる朝にありがとうを忘れてたから全部まとめて今日にありがとう」一。支えられ、励まされ、今度は励ます側に。二人で紡ぐ「壺行の歌」は、格段に輝きを増している。





(白鳥龍也)

## 障害者水中運動会に助成



中日新聞 2016年5月19日  
粟森昌哉支社長(左)から目録を受け取り、笑顔の北端芳子代表(中)と榎野昌子副代表=金沢市で  
金沢の団体へキリン財団

2016年度キリン・子育て応援事業の助成金贈呈式が18日、金沢市のキリンビールマーケティング石川支社であり、障害児や障害者の水泳や水中運動を支援する任意団体「福祉水泳きらり☆」(金沢市)の北端芳子代表に粟森昌哉支社長から目録が手渡された。

キリン福祉財団の公募助成事業で、地域の子どもらに関わる活動を応援している。16年度は全国で126団体に贈る。石川では「きらり☆」が初めて

企画した水中大運動会に28万円の助成が決まった。

粟森支社長は「助成を契機に活動の輪が広がることを期待します」などと贈呈文を読み上げ、北端代表は「活動をたくさんの方に知っていただく契機にしたい。助成金でボランティアが集まる状況も整えることができそう」と感謝した。榎野昌子副代表が同行した。

水中大運動会は7月3日、金沢市の鳴和台市民プールで開く。障害者と家族が楽しめるイベントで現在、参加者を募集中。定員50人。運営を支えるボランティアも募っている。問い合わせは、北端さん=電090(1315)9373=へ。(松瀬晴行)

## 障害者らが白球追う 福祉施設が交流野球 西脇

神戸新聞 2016年5月18日

野球で交流する福祉事業所の利用者ら=西脇市、黒田庄ふれあいスタジアム



福祉事業所に通う利用者らが交流する野球大会が18日、兵庫県西脇市黒田庄町喜多、黒田庄ふれあいスタジアムで開かれた。知的、精神障害者や事業所職員ら約30人が参加し、白球を追ってグラウンドを駆け抜けた。

加東市下滝野の障害者福祉事業所「絆みらい」の利用者たちが「大きな球場で野球がしたい」と、同スタジアムを管理する障害者就労支援施設「ドリームボール」に試合を申し込んで実現。同市黒田庄町前坂の地域活動支援センター「なかよし工房」の利用者も加わった。

プラスチック製の棒の上にゴム製のボールを置き、攻撃チームが打つ独自のルール。出場人数に制限はなく、メンバー全員が打ち終わるまで攻撃は続く。守備は、ボールが来そうな場所を全員で守る。

ほとんどが野球の経験がないため、当初は参加に消極的だったというが、2チームに分かれて点数を付けると「負けたくない」と力が入り、バッティングでは予想以上にボールを遠くまで飛ばすことができたという。

1カ月前からキャッチボールを練習したという「絆みらい」利用者の女性(21)は「一塁まで走るのはしんどかったけど、ボールが飛んだときは気持ち良かった」と笑顔を見せていた。(敏蔭潤子)

## 社説 1億総活躍プラン 実現への確証はあるか 毎日新聞 2016年5月19日

政府は1億総活躍社会のプランを発表した。非正規労働者の待遇改善、長時間労働の是正、保育士や介護士の賃上げなどが並ぶ。これまで社会保障政策は高齢層に偏っており、若年層に焦点を当てた包括的な改革案の方向性は評価できる。

このまま人口減少が続くと2100年に日本の人口は5000万人を切るとの推計があり、政府の強い危機感を表した内容と言える。ただ、どのように実現するのか、十分な根拠が示されているとは言い難い。

プランは同一労働同一賃金の実現を最重視する。日本の非正規社員の賃金は正社員の6割程度に据え置かれており、諸外国並みの8割程度に引き上げることを目指す。労働契約法など関係法令を改正し、「不合理な待遇差」を是正するため司法判断の根拠になり得る基準を定めるといふ。企業が行政指導に従わない場合、非正規社員が訴訟で解決する方法を後押しすることで、企業側の取り組みを促すことを意味する。

ただ、異なる業種ごとに労使双方が納得できる基準を設定するのは複雑な作業が必要だ。経営者側が人件費増を避けようとして、正社員の賃金を下げたり、非正規社員を増やしたりして対応すれば、低水準の同一賃金になる可能性もある。

保育士は17年度から月給を2%（約6000円）引き上げた上、ベテランの給与を最高月4万円程度上げるといふ。保育士の給与は全産業平均より11万円も低く、この程度の賃上げで質の高い保育士が十分に確保できるとは思えない。

プランに盛り込まれた保育士や介護士の待遇改善には約2000億円が必要だが、アベノミクスによる税収増を充てるとされているだけで、恒久財源のめどが立っているわけではない。もともと10%の消費増税に伴って子育て支援策には1兆1000億円が投入される予定だったが、いまだに7000億円しか確保の見込みがないのだ。

1億総活躍は（1）国内総生産（GDP）600兆円（2）希望出生率1・8（3）介護離職ゼロという「新三本の矢」を実現する包括的政策だ。所得格差を是正する「分配」と経済成長の好循環を目指す方向性は間違っていない。

放課後児童クラブについて18年度末までに30万人分を追加整備すること、不登校の子供たちに原則無料の学習支援を行う「地域未来塾」を19年度までに5000カ所へと拡充することなども盛り込まれた。子供や若い親の支援はさらに手厚くしないといけない。

選挙対策のための「絵に描いた餅」との批判を受けないためにも、政府は実現可能性を裏づける根拠をもっと掘り下げて提示すべきだ。

## 【主張】1億総活躍プラン 画餅に終わらぬ財源示せ 産経新聞 2016年5月19日

少子高齢社会をどう乗り越えていくか。安倍晋三首相が「克服に向けた道筋」を示すものとする「1億総活躍プラン」をまとめた。

政策を43テーマに再整理し、10年間の期限を切って示した。中長期にわたる課題に果敢に取り組む姿勢は評価したい。

だが、内容的にはすでに政府内で検討されてきた政策を網羅した感が否めない。「処方箋」として期待されていた分だけ失望も大きいのではないか。

今後は、列挙した政策を実現する具体的な方策を示し、優先順位を付ける必要がある。とりわけ説明を求めたいのは、安定財源をどう確保するかである。「アベノミクスの成果を活用する」というだけでは、確実な財源としてカウントできない。

盛り込まれた政策の実現には全部でいくら必要か。限られた財源の中で、成果を実感できるプランに仕上げるのが政治の役割だ。

注目される保育士や介護職員の待遇改善策だけでも、2千億円を要するという。奨学金制度の拡充など、新たな財源を必要とするメニューも次々と打ち出したが、社会保障・税一体改革で決めた政策の履行もすべて達成していないことを忘れていないか。

一体改革で宿題となった、保育の質の向上策も財源の見通しが立っていない。一方で政

府は社会保障費の伸びの抑制を求めてきた。これらとプランとの整合性も説明が必要だ。

非正規社員と正社員の賃金格差縮小や残業時間規制など、働き方改革にも踏み込んだ。少子高齢化が進む日本にとって、労働力の確保は最重要課題であり、一歩前進したといえる。

だが、同一労働同一賃金や残業規制などは企業経営に直結する。政府が旗を振ったら、すぐに実現するものではない。企業側の理解をどう取り付けていくかのアイデアを聞きたいところだ。

少子高齢化対策という大テーマを対象としているため、考えつく政策をすべて詰め込んだ印象は残る。わずか8回の国民会議で結論が出された。実効性が上がるようさらに練り上げてもらいたい。

「1億総活躍は参院選向けのスローガン」との声は与党内にもある。「大風呂敷を広げただけ」に終わらぬよう、安倍首相には約束を実現する強いリーダーシップが求められる。

## 社説：生産性上げる働き方改革を促せ

日本経済新聞 2016年5月19日

勇ましい名前のわりには物足りなさが否めない。政府がまとめた「ニッポン一億総活躍プラン」のことだ。

子どもを産み育てやすい環境を整え、仕事と介護を両立させ、高齢になっても働き続けられる社会をめざすとの趣旨に異論はない。少子化対策や働く人を増やすことは、人口減少という供給面の制約を乗り越え、日本経済の潜在成長率を高めるために欠かせない。

### 労働規制の見直しを

問題はプランのメニューが的を射ているかだ。子育てや介護の支援では欧米に比べ際立つ長時間労働を改める必要があるが、出てきた是正策は効果に疑問符がつく。

全体的に企業の働き方改革を後押しする施策をもっと充実させるべきではないか。労働規制の見直しを中心に練り直し、実効性のあるものにするよう求めたい。

プランで評価できる点はある。一例は非正規で働く人たちの待遇改善だ。仕事と同じなら賃金を正社員と同じにする「同一労働同一賃金」の実現をめざすとした。

日本のパートの賃金は正社員を中心としたフルタイム労働者の6割にとどまり、8～9割の欧州より低い。収入が低いと子どもを産み育てる意欲が薄れるとの指摘もある。処遇向上は意義がある。

ただし前提として重要なのは、生産性の向上である。働く人が自らの生産性を高め、それに伴い賃金が上がっていくという形でなければ、企業による待遇改善は長続きしない。非正規労働者の自発的な能力開発に対する支援や職業訓練の充実にも政府は力を入れるべきだ。

長時間労働の是正策は、十分かつ持続的な効果があるかが問われる。労働基準監督署が立ち入り調査に入る際の残業時間の目安を1カ月100時間から80時間に下げるとしたが、こうしたやり方には限界があろう。

1人あたりの年間労働時間はドイツが1300時間台、フランスが1400時間台なのに対し、日本の正社員は2000時間超で高止まりしている。

長時間労働の悪影響は深刻だ。第1子出産を機に女性の6割が離職する現実がある。管理職への昇進をためらう人も少なくない。男性が子育てや家族の介護に積極的に参加するうえでも、長時間の残業は障害になる。時間外労働を根本から抑える手立てが要る。

一定の規制強化は必要だろう。現在は労使で協定（三六協定）を結べば時間外や休日労働が認められるが、政府はこの制度を再検討するとした。特別条項付きの協定なら月45時間を超える時間外労働が可能になっており、この点の見直しが求められるのは確かだ。

同時にメリハリのきいた働き方を広げるための労働規制改革も、長時間労働を減らすには必要だ。

働く時間でなく成果に対して賃金を払う「脱時間給」制度を新設する労働基準法改正案

を早く成立させなくてはならない。企業と社員に多様な働き方の選択肢を用意することが重要だ。規制の緩和と強化をうまく組み合わせたい。

気になるのは企業への資金支援が目につくことだ。高齢者の就労支援として、65歳以降の継続雇用制度を導入した企業などへの助成を拡充する。だが予算を確保できなくなったとき、雇用を打ち切る企業が出てくる心配はないか。

### 民間の力を生かそう

定年後も同じ会社で働く仕組みだけでなく、定年前を含め、別の企業や仕事に移って働き続ける道を選ぶようにすることも大切だ。人材が需要のある分野に移っていきやすい柔軟な労働市場の整備が求められる。転職支援など人材サービスを活発にする職業紹介への規制の改革を急ぐべきだ。

政府は保育の受け皿を来年度までに50万人分整え、保育士と介護士について、人手不足を和らげるため給与の引き上げを決めた。あわせて、どう財源を確保するか議論も必要だ。

処遇改善には民間の力を活用することも大事だ。介護では保険外の市場を育て、事業者の創意工夫で多様なサービスを提供することで収益を拡大し、働き手の収入を増やすという方法もある。

保育も株式会社などの参入を促し、競争を通じて保育サービスの質を高めることで、保育士の賃金を上げていくことが可能だ。

今回のプランに総じて足りないのは、生産性を上げることによって賃金上昇や雇用拡大が実現するという市場メカニズムの活用だ。正規、非正規や年齢などの違いを問わない。そこを政策の軸に据えなければ、「一億総活躍」は看板倒れになりかねない。

### 社説：1億総活躍 具体化への道筋示せ

朝日新聞 2016年5月19日

安倍政権が看板政策に掲げる「1億総活躍プラン」をまとめた。社会保障分野を中心に暮らしの基盤を厚くし、国民の安心感につなげる。それが消費を底上げし、経済成長をもたらす。そんな「成長と分配の好循環」をうたう。

内容は多岐にわたるが、柱は労働分野と育児・介護分野だ。同一労働同一賃金や、最低賃金として時給1千円をめざし、非正社員の待遇を改善する。長時間労働を是正する。人手不足が深刻な保育や介護の現場で働く人の賃金を引き上げる。そんな目標が並ぶ。

どれも長年の懸案であり、対応を急ぐべきだ。しかし、いずれも実現は容易でなく、具体化への道筋はなお見えない。

参院選が近い。風呂敷を広げたはよいが、尻すぼみになっていくようなら、選挙目当てとの批判は免れまい。問われるのは首相の本気度と実行力だ。

同一労働同一賃金では関連法の改正に踏み込むとしたが、まずは何が不合理な待遇差かを明確にできるか。「同一」の中身も、総じて賃金水準が低い非正社員の方に合わせるのではなく、全体の底上げにつなげねばならない。

子育てや介護と仕事の両立を阻む要因ともされる長時間労働は、関連する規定を見直すかどうかの検討を厚生労働省の審議会に委ねるといふ。まずは政府として、労働時間の上限規制に踏み込むなど改革の方向性を示すべきではないか。

保育所や介護施設を増やしても、働く人がいなければ役に立たない。保育士や介護職員の賃金を来年度から引き上げるとしたのは前進だが、2千億円ともされる財源の検討は年末の予算編成時に先送りした。教育分野では、関心が高い「給付型奨学金」の創設が、やはり財源問題から検討項目にとどまった。

「アベノミクス」による税収増を活用するとの声もあるが、安定的な財源と言えるだろうか。他の分野の予算を無理に削って財源をひねり出すのも本末転倒である。

そもそも子育て支援は、「税と社会保障の一体改革」で充実を約束している。しかし消費税率を10%にしても財源がなお3千億円足りない状態だ。いまだにめどが立たず、保育

士の配置を厚くするなどの施策が置き去りにされている。

まずは消費税率を予定通り10%に上げる。それでも財源が不足する現状を直視し、国民が納得できる確保策を示した上で、一つずつ着実に実行していく。それが責任ある態度である。

## 社説：1億活躍プラン 実行、実現への道筋は？

中日新聞 2016年5月19日

スローガンはいいけれど、実現への道筋が見えない。政府の国民会議が取りまとめた「一億総活躍プラン」だ。列挙された目標は社会改革といってもいいだろう。実現の手だてを示すべきだ。

「介護離職ゼロ」「出生率一・八」「待機児童ゼロ」「同一労働同一賃金の実現」「長時間労働の是正」…。これまで安倍政権が「一億総活躍社会」実現に向けて打ち出したスローガンの数々だ。

プランには、人手不足が深刻になっている保育士や介護職員の賃金引き上げが盛り込まれた。来年度から平均月額で保育士は六千円、介護職員は一万円アップするという。

しかし、この程度の賃上げでは人材確保は難しい。保育士や介護職員の平均月収は全産業平均と比べ十数万円以上も低いのだ。

実現には一千億円以上が必要だが安定的な財源は示されていない。これでは説得力はない。

また、雇用形態にかかわらず仕事の内容が同じなら賃金も同じにする「同一労働同一賃金」では、非正規労働者の待遇改善は「待ったなしの課題」と強調。正社員に対する非正規労働者の賃金水準は約六割だが、八割程度の欧州並みに縮めることを目指すとした。

その手段として、「不合理な待遇差」を明示するガイドラインを策定。労働契約法、パートタイム労働法、労働者派遣法の三法の一括改正を検討するとしているが、どのような規定をどう見直すのかは、不明だ。

長時間労働の是正に関しては、上限のない時間外労働を認める労使協定（三六協定）について「検討を開始する」とするのみだ。

週当たりの労働時間が四十九時間以上の長時間労働者の割合は日本は二割超で、フランスやドイツのほぼ倍に上る。これを欧州並みにするということだが、どういう手段で労働時間を減らすのか、分からない。国民会議では、総労働時間の上限規制を求める声も出ていたが、踏み込まなかった。

同一労働同一賃金、長時間労働の規制に対する経済界の警戒は強い。「欧州並み」への道のりは容易ではない。

プランは「誰もが活躍できる社会を創る」とうたうが、背景には、少子高齢化で減る労働力人口を、出生率の向上や女性の就労率を高めることなどで補い、経済成長につなげようという狙いがある。成長率のためだけでなく、一人ひとりが暮らしやすい社会を目指す取り組みをしてもらいたい。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も



大阪市天王寺区生玉前町 5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行